

景/観/文/化

NPO法人 景観デザイン支援機構 Town Design Aid, Japan <http://www.tda-j.or.jp>

2025-05-01

目次

- P1
 ■巻頭
 ビッグプロジェクトとミニプロジェクト
 ／井口 勝文
- P2～3
 ■TDA NEWS-1
 TDA大阪視察報告
 ／泉 英明・岡 絵理子・兵藤真一郎
- P4～7
 ■TDA NEWS-2
 TDA連続セミナー 2025「Vol.1：下町にみんなの居場所をつくる」開催報告
 ／中村 出・国峯 朝紀・金子 祐介
- P6～7
 ■景観故記
 No.11 建築家・アーバンist横文彦氏から学ぶこと
 ／高谷 時彦
- P8
 ■身近な景観を作る
 第13回 日本大通り①
 ／小田嶋 鉄朗
- 景観サポーター
 ／SD Lighting(株)
- ホワイトボード



ビッグプロジェクトとミニプロジェクト

東京のメンバーが多いTDAを大阪に迎えてのセミナーは、日本を代表する2つの都市を考える専門家が一堂に会したことで、我が国の都市開発の今日的な課題を見据える貴重な機会になった。決して大げさではなく。

世界の先進国がポストモダン（脱産業社会）を目指す都市のパラダイムの転換を始めて、すでに半世紀が過ぎている。日を追って身近に感じられる地球環境問題は、それが先進国だけの課題ではなく、途上国を含む地球上のすべての都市の課題であることを都市の実務に関わる我々は実感している。量的拡大を目指す産業社会から知識・文化の社会へ、業務、商業集積からオープンスペース・グリーンスペースがシンボルとなる都市へ、自動車社会から歩行者優先の街へ、スクラップ&ビルドからストックの社会へ・・・。

目指すべき方向は既に明らかであるにもかかわらず、我が国の都市開発の方向は依然として産業社会の価値観が主導していると思えない。東京の汐留シオサイト、渋谷、池袋の再開発、虎ノ門ヒルズ等々、我が国の主要都市のビッグプロジェクトは今もその方向を目指している。

しかし都市のパラダイムの転換はその陰で徐々に進行している。

大阪では北浜テラス、中之島リバーサイドテラス、下町の魅力的な再生。東京でも大規模な都市再開発が進む一方で南池袋公園の再整備、小田急電鉄の下北線路街のようなヒューマンスケールのまちづくりが見られる。地方の中小都市ではむしろそのようなミニプロジェクトの方が主流になりつつある。

北梅田の「ナレッジキャピタル」とそれを都市空間として実現した「うめきたのみどり」、そして大阪の歩行者の街づくりを先導する「なんばひろば」。日本の価値観も変わりつつあることを感じさせるプロジェクトだ。そこをテーマにしたTDAの大阪セミナーは、日本の都市のパラダイムの転換を共感する大きな意義があった。INOPLAS 都市建築デザイン研究所／TDA正会員 井口 勝文

TDA大阪視察報告

大阪の都市デザインでは、ハードルが高いと思われる用途の変更や道路インフラの再配分などを伴った整備が進んでいる。その目に見える風景の底流にある「なぜそれが実現可能なのか？」を探った3月29日・30日開催のTDA大阪視察を報告する。

なんば広場の実現までのポイント

(有)ハートビートプラン 代表取締役
泉 英明

1. プロジェクトのあらまし

派手な電飾看板や立体看板が連なる道頓堀、活気ある商店街、“笑い”の聖地となる劇場など、国内外の観光客でにぎわい、大阪らしいエンターテインメント要素が詰まった街、大阪なんばエリア。関西国際空港に直結するターミナル駅、南海なんば駅の目前に広がる約6,000㎡の広場が、車中心の空間から人中心の空間に大変身した。



写真：上／従前、下／従後



2008年に地元の商店街の発意で道路空間を歩行者に解放したいと始まった取り組みは、民間主導で行政や経済界も巻き込み現在進行中である。ビジョンを官民で共有し、ターミナル周辺の交通・道路空間を再編し、完成後に運営管理する地元主体がデザインやマネジメント計画に関わり、社会実験で課題を検証し合意形成を図ってきた。

既存道路の再編実現には、周辺店舗の物流、住民の生活動線など、周辺の車両交通体系にも影響を与えることになるが、地元と行政が一丸となり、関係団体・機関への協力要請をはじめ、地道かつきめ細やかな地域合意に努めた結果、構想開始から15年目の2023年11月に念願のなんば広場が誕生し、2025年3月末には、なんさん通り電線地中化も含めた工事が完了した。

本プロジェクトの目的は、「駅前歩行者空間の拡大により、駅と商店街・観光地をつなげ、なんば全体を回遊するネットワークおよび滞留空間の創出と、街の賑わいや経済効果を生み出すことによるエリア価値向上」であり、広場がエリア全体を回遊するハブ（＝拠点）となることを目指している。

国内でも珍しい、地元発意による公民連携事業であり、開発型ではない既成市街地型の公共空間再編であり、商店街・企業・町会が一体となり官民合意形成や費用捻出・運営を進めており、将来の運営主体が空間デザインに関与する体制を構築している、などの特徴を持つ。

2. 実現までのポイント

なんば広場では、将来ビジョンを打ち出し、2016年及び2021年の2回の社会実験

での検証を重ねて常設化につなげた。1回目と2回目では目指すプランは異なり、2回目では最終形の完全歩行者空間化のプランに改善された。交通プランの再検討でネックとなったのは一般車の制限、荷捌車の動線・停車空間の確保であった。自ら地元が調査を行い、荷捌き車のシミュレーション、歩行者の快適な環境と荷捌き車両が両立できるプランを検討した。大阪市と地元において、めざすべきプランとそれを実現させるための要素、合意形成対象者を整理し、地元側は丁寧な各関係者への説明や合意形成を行うとともに、大阪市は各管理者の協議を進め、理想案の最終プランに落ち着いた。

当初想定した広場となんさん通りのみのハード改修から、なんば駅ターミナル周辺全体及び御堂筋にまで改修・影響範囲が大きく広がった。地元関係者、物流事業者、公共交通事業者、道路・交通管理者のコンセンサスを得るため、ビジョン仮設に沿った検証項目の設定、データ収集・分析、改善プランの提案、市民や世間への情報発信とコミュニケーション、回遊データ検証などを進めてきた。

現在、広場では3度目の社会実験が始まっている。持続的な広場運営のため、財源確保手法の確立が課題であり、主な内容は、①地域環境保全（清掃・警備業務等）、②利活用（平常時の憩い空間づくりやイベント開催等）③財源確保の3つを検証し、地元による持続運営を目指している。

グラングリーン大阪

～大阪駅前に4.5haの「みどり」が実現したプロセスとその意義～

関西大学環境都市工学部教授 岡 絵理子

水盤が埋め込まれた広大な芝生広場が大阪駅前に広がっている。このこれまで見たことがない空間に誰もが驚いた。うめきた2期区域事業であるグラングリーン大阪が2024年9月6日にオープンした。さらに、広場に面する施設群（南館）が2025年3月に開店し、芝生広場ではゲーム遊びに興じる人々、水遊びをする子供達で賑わっている。都市計画公園全体は4.5haあり、2027年には敷地北側に池や滝の水景のある「うめきたの森」もオープンする。まだ完成していないにも関わらず既にその評価は大変高く、この巨大なみどりを仕掛けたのは私だと名乗りを上げる人も数々。これはやはり、うめきた2期が祖上に載った2000年



2025 年 3 月のグラングリーン大阪

以来関わってきた多くの関係者、関係機関すべての方々の成果だと言うしかない。

とはいうものの、大阪経済人の思いがその初期段階から動かしたことは間違い無く、そのことは次章に詳しい。どのような空間づくりをすすめるかの議論が何度も丁寧に行われたそのプロセスは、大阪市のホームページに掲載されている膨大な議事録からも読み取ることができる。このような大阪経済人の思いが現在のグラングリーンに関わる事業者を受け継がれた。その結果、この大阪市の4.5haの公園を、グラングリーン内の事業者による出資と、関係している様々な企業から出向している熱い思いを持つ人々で構成される「一般社団法人うめきたMMO」によって、50年間シームレスに運営するという気の遠くなるようなマネジメント契約を実現させている。



2015 年、第 2 期敷地に会議室をつくり、暫定利用のための会議を実施してみた時の様子

うめきた 1 期のグランフロント大阪では、「一般社団法人グランフロント大阪 TMO」が、2013 年 4 月、当時まだ珍しかったエリアマネジメントに取り組み、景観コントロールを行うことで、その質を保つ仕組みを作り上げたことが話題となった。地区計画で位置付けられた「うめきた広場」は、しっかりとコントロールされた貸出イベントだけでなく、多くの自主イベントを実施することで、音楽の世界を始め様々な梅田発信の文化を生み出している。また管理の考え方は、利用者の行動を制限するのではなく、見守ることを大原則として居心地の良い空間を実現してきた。12 年が経過した現在も、社会変化や施設更新

に合わせて日々ブラッシュアップを重ねて、大阪の新しい顔を作り出している。

「うめきたMMO」は、「グランフロント大阪TMO」のエリアマネジメントの考え方、特に利用者との関係の基本原則を受け継ぎ、さらにパークマネジメントにおいてもその原則を取り入れることで、人々が思い思いに過ごすことができる新しい公園のカタチを実現しようとしている。

グランフロント大阪が完成してからの数年間、うめきた 2 期の暫定利用事業に大阪市とUR都市機構が積極的に取り組んだことも今に至る重要な動きだったと思う。企業だけでなく地域住民などさまざまな団体が「使い方」を提案し、工事期間中も広大な空間を楽しんだ。実はその初っ端に私も仲間を集めて、暫定利用プレ会議を行っていた（写真）。

さて、現在目の前にあるグラングリーン大阪は世界的ランドスケープアーキテクト会社GGNの提案によるもの。担当者は日本人女性で、大阪梅田の歴史、地勢、植生を読み解き、梅田スカイビルも含めた環境を織り込んだ、色褪せることのない大地性のある空間を提案してくれた。

うめきた 2 期は、大阪最後の開発地と言われている。東京の開発に比べれば、市場性がそれほど高くなかったこと、ゆっくりと事業を進めることができたことなど、日本における大阪という都市の立ち位置を、ある意味フルに活かしたと結果ともいえる。2027年にそれら全てが完成する。様々な人たちが想いを込め、丁寧に作り上げた空間を次世代が受け継ぎ、50年後どのような森ができていいのか、見てみたいと思える場所である。

TDA大阪まちあるき報告

SD Lighting(株) 兵藤 真一郎

大阪での開催ということで久しぶりにTDAまちあるきへ参加させていただくことが出来た。

初日はなんば広場であったが、ご案内いただいたハートビートプランの泉さんのお話で、ここでは特に空間利用の再編に伴う大規模な交通計画の見直しが行われたのだが、その調整に至る経験談が印象的だった。また地元有志による民間からの発意より足掛け15年を経て、この街の在り様まで変える官民連携の大規模なプロジェクトを成立させてきたことは、あらためて関係者の方々の熱意と力に圧倒される思いであった。実はこの計画にはご縁をいただき広場照明のお手伝いで何度か訪れていたのであるが、そういったお話を伺った上であらためて現場を訪れると新たな感慨を覚えた。

2日目はうめきた公園について管理運営者の三菱地所の有本さん、阪急阪神不動産大亦さんのご案内による現地視察を行い、その後グランフロントのナレッジキャピタルにて、このプロジェクトを一貫して進められた元関西経済同友会の篠崎さんによる計画プロセスをお聞かせいただいた。こちらでも街の中心に広大なオープンスペース(公園)を設けて、それを核とすることで空間的魅力を創出し、エリアのにぎわいと価値創造を図るものである。

なんば広場もそうであったが、人々が沢山訪れ各々楽しんでいる様子を伺うに大変居心地が良さそうで、街の中心にこそこういった場づくりが必要であるとの思いを強くした。

今回視察したなんば広場、うめきた公園にかかわらず御堂筋のウォークアブル事業等、大阪は全国に先駆け歩行者利用空間の再編を通した新たなまちづくりが大規模に進められている。大変重要なサンプルを身近に体験出来る立場であることを自覚させられた。

最後になりますが、今回の企画へお誘いいただいたYSポール工藤さん、まちあるきを企画・運営された中野さんはじめ関係各位の方々、ご案内いただいた方々へはあらためて御礼申し上げます。ありがとうございました。



夜のなんば広場でがんばる弊社スポットライトポール(画面中央)

TDA 連続セミナー2025 「Vol.1: 下町にみんなの居場所をつくる」開催報告

2025年1月25日に開催されたTDA連続セミナー2025「vol.1: 下町にみんなの居場所をつくる～それは銭湯の再生から始まった～」の開催概要をお伝えする。

地域性を活かして豊かに生きる

(株)ナカムラ 建物再生室長 中村 出

2025年2月、私が学生時代(工学院大学)設計課題のエスキスでお世話になった高谷時彦先生の御依頼でTDA(景観デザイン支援機構)という団体様向けに自身の仕事とまちづくりに関するレクチャーをさせていただきました。数カ月前に相談を受けた時にTDAという団体の主たるメンバーが御所の先生方だとお聞きして恐れ多い気持ちでした。その中には私が学生時代に授業でライドスケープや都市デザインの先生であった倉田直道先生もいらっしゃいました。私からすれば先生方に対して自分の仕事を介して建築やまちづくりの話をするという冷や冷やするような企画でしたが、学生時代の学びがあって今の自分と仕事があるという自覚も大きかったので、自分の近況報告も兼ねてチャレンジしてみようと考え、昨年末頃からレクチャーの準備を始めました。今回はその時に紹介した内容も踏まえて、「学生時代にのめり込んだ歴史ある建物の

世界」「学生時代から通った銭湯建築の保存再生」「故郷や実家を活用して豊かに生きることの模索」という3つのテーマで執筆します。

1. 学生時代にのめり込んだ歴史ある建物の世界

私は、1984年山形県新庄市に生まれ高校まで過ごした後、2004年に工学院大学に入学しました。特に設計課題が始まる2年生以降の時期に同期や先輩が構想する建築に刺激を受けると同時に建築を仕事にすることが自分に向いているのだろうかと下を向くことも多々ありました。しかし、自分が所属する研究室を考える3年生の時に古い建物調べて、残したり活用したりするために全国各地に訪問する研究室があることを知りました。私の人生の転機でもある後藤治研究室です。面接で出会った先輩も親しみやすく、新宿のビルの中で黙々と作業するのではなく全国の民家やお寺、産業遺産等の現場に入り込み、小屋裏、床下に入り込んで全身土まみれになりながら調査をするという後藤研に魅力を感じ、ここなら何かを掴めるかもしれないと思い入室することになりました。

自分の出身地である東北から四国まで、調査地は本当に広く、特に記憶に残っているのは当時伝建(伝統的建造物群保存地区)を目指してかなりの棟数を実測した岐阜県郡上八幡と自分が卒業論文を書かせて頂いた愛媛県宇和島市津島町岩松という地域です。ここで、古民家と一言で言っても地域や年代ごとに作り方やデザインがまるで違うということを感じました。関東以外の調査地となると宿泊や懇親会等の機会も

あり、地方の役所の方や地域住民の方とも交流をすることができる点も自分にとってはとても有意義でした。故郷以外の地域の方と密に話して地域の実態を聞くことができる機会は社会人になってからでもそう多くはないので、贅沢な時間だったと思います。また、設計することや図面を描くことに自信を持てなかった自分が、様々な年代の建物を調べて測って図面化するということを繰り返して空間を把握する力、作図する力を少しずつ養っていったことも良い訓練になったと感じています。このようにして全国各地の古い建物の調査をしている間に、旅行先でも活用されている古民家、公共施設を見て歩くことに没頭していきました。



建物を調査し話を聞くことが今につながっている

2. 学生時代から通った銭湯建築の保存再生

私が仕事において本格的に「古い建物の保存再生」を仕掛けたのは2015年頃のこと。

当時の自分自身の居住地東京都台東区にある入谷(正確には下谷、入谷、根岸)というまちから始まりました。このまちは、私の父の故郷で、自分も学生時代(20歳頃)から暮らしていました。戦前から残る古民家、長屋、銭湯、写真館、お煎餅屋さん、肉屋さん、花屋さん、神社、お寺等が残り、どこかほっとする風景がかろうじて残っていますが、一方で、古い建物が解体され、駐車場やマンションに変わり、見慣れた風景が壊れていくのを目の当たりにすることも増えてきていました。研究室の調査を通じて自分が魅了された味のある古い建物が目の前で壊されていくことに対して、自分に何かできないものか?と思うようになったのもこの時期(2015年頃)でした。

自分が暮らしていた住まいからほど近い場所に「快哉湯(かいさいゆ)」という銭湯があり、疲れが溜まった時はここに行き、富士山のペンキ絵を見ながらのびのびとした浴槽の湯に浸かって心身を癒しました。高校まで住んでいた新庄にはこのようなスタイルの銭湯が無く、最初に入った時は衝



レボン快哉湯は古き良き下町の銭湯の風情を残しながら、地域に新しい価値をもたらしている

撃を受け、いつのまにか通うようになりました。

そんなことがきっかけで、ビルばかりで古い建物なんて無いと思い込んでいた東京のまちを歩くようになりました。歩いてみると入谷、根岸にも素敵な建物が存在し、さらに東京芸術大学がある上野桜木、谷中のほうに足を延ばすとその味のある古民家を保存活用されている団体(NPOたいとう歴史都市研究会)があることを知りました。この団体を知ると間もなく、自分自身もその団体に入会し、東京における仕事ではなかなか触れるチャンスが無かった古い建物に関われることがとても嬉しく、積極的に会の方達と関わるようになりました。入会して数か月後に、とある銭湯からNPOに御手紙が届いていると私に通知があり、なんと私が通っていた快哉湯の家主さんからの御手紙でした。長年銭湯を営んできた家主さんも高齢になり、建物や設備も老朽化しているので銭湯は近い将来やめてしまうが、建物には思い入れがあるので保存活用する方法があるかどうか知りたいという内容でした。日常的に入りに行っていた銭湯の危機を知ってショックを受けると同時にNPO入会直後にこの話が自分に届いたことに驚きました。NPOメンバーと一緒に建物調査をさせて頂き、間取り、構造、規模感、劣化具合を把握した上で、どう活用していくかという対話が始まりました。

考え抜いた末、浴室側をシェアオフィス、脱衣所側をカフェにするという案に落ち着きました。その理由の一つ目は、自分自身がこれからの時代を見据え、スクラップアンドビルドではない建物再生の拠点をここ快哉湯に作りたいという大きな構想を抱き始めたこと。もう一つは建物全体がオフィスとなると銭湯のようにふらっと入る場所が失われると思い、まちに近い脱衣所にはカフェを併設させたいと思ったことです。この大きな方針と家主さんから建物をお借りする賃料等の条件の話し合いが決着し、快哉湯はオフィス兼カフェとして保存活用されることとなりました。

自分達で活用するために傷んでいる部分の修繕、耐震補強計画、オフィスとカフェとして成立させるための計画、そして施工。計画～施工のプロセスは自分の夢が叶う瞬間でもあって眠れないほどワクワクした日もあり、また古くなっている建物の改修に時間、労力、費用が想像以上にかかり不安を感じる日もありました。

平成の終わり、2019年の4月に建物再生が完了しお披露目会を行いました。家主さん御一族はじめ、入谷、台東区で活躍される方達、大学の同級生、先輩後輩達が蘇った快哉湯を見に来て下さり感動の一日でした。そして、自分達「建物再生室」の拠点として仕事がスタートしました。その時点でカフェの運営形態、借り手は決まっておらず、平時はオフィスと打ち合わせで使い、休日に地域の方から持ち込まれたワークショップ、マルシェ、絵画展、ライブ等を行いました。その約1年後、近隣のホテル運営者(株式会社ベステイト)と知り合い、rebon快哉湯という名のカフェがオープンして今に至ります。



レボン快哉湯ではいろいろな活動が行われている

3.故郷や実家を活用して豊かに生きることの模索

私が所属する株式会社ヤマムラの本社は今現在も自分が生まれ育った山形県新庄市にあります。平成の終わりに東京入谷の銭湯を活用して建物再生の活動を始めたわけですが、その一方で故郷新庄市にある昭和初期の旧蚕糸試験場(現在のエコロジーガーデン)という建物の保存活用について2009年から恩師後藤治先生に相談をしながら所有者である新庄市に働きかけをしていました。20代30代は東京に暮らしていたものの故郷の建物に目を向けてこのような活動が出来たのは20代前半の時点で家業であるヤマムラに入り、両親とよく故郷の地域づくりの話をしていたからだと思います。長い時間を経て旧蚕糸試験場は複数棟の建物が登録文化財になり、3棟が耐震改修(施工:ヤマムラ)され産直市場、カフェ、シェアオフィス、イベントスペース等として徐々にまちに開かれる形となって



新庄市にある旧蚕糸試験所

いきました。

このようにして私は2015年以降、建築会社ヤマムラにて故郷新庄と東京入谷の2拠点を行き来しながら建物再生の仕事に力を入れてきました。その間コロナ禍があり、リモートワークや地方移住、2拠点居住という言葉も世の中でよく聞くようになり、まさに自分もその当事者だと感じます。故郷に暮らし、地域住民の方や自治体の方と関わっていても移住、2拠点、関係人口、空家活用という言葉が飛び交い、具体的に相談されることも多々あります。

地方や日本全体の人口減少に伴う空家問題は深刻で、一気に解決するということはまず無いのだと思いますが、地域ごとに私達のような30～40代の子育て世代がUターンを考えたり、2拠点目で故郷や実家で働いたり暮らしたりする環境を自らつくることが以前よりもリアリティを持ち、地域にも歓迎される時代になってきていることも感じます。自治体の政策として移住や二拠点を推進することも良い流れだと感じていますし、自分自身と関係者(家族、先祖、社員等)の故郷に関心を持ち、関わり、いかに大切にできるかということに意識が向いています。開発されつくして均一化されたまちよりも、地域性のある家、蔵、納屋、田畑が残っていて、その土地で採れた食材、風景を楽しめる暮らしに豊かさを感じるので、そのようなことが今後も続けられるように日々活動、発信していきたいと思っています。

【参加者の感想】

建築が紡ぐ、人のつながり

芝浦工業大学大学院松下研究室 国峯 朝紀

今回のセミナーで紹介された「快哉湯」のリノベーションは、単なる古建築の再生にとどまらず、地域と人々の記憶、そして未来への願いが丁寧に織り込まれた取り組みとして深く印象に残った。特に心を動かされたのは、この再生のきっかけが、オーナーによってNPOたいとう歴史都市研究会に送られた手紙であったことだ。建築の再生が、専門家主導ではなく市民の想いから始まったという点に、このプロジェクトの本質があるように感じた。

昭和初期に建てられた銭湯「快哉湯」は、かつて地域の人々が日常的に集い、言葉を交わし、身体を癒してきた場所であった。その文化的な役割は、現代においても

なお大きな価値を持っている。今回のリノベーションでは、靴を脱いで上がるという動作が意識的に残されており、非常に印象的である。建物を単に改修するのではなく、人々の身体に染みついた所作や記憶を引き継ごうとする姿勢に、文化の継承への強い意志を感じた。

また、外観が大きく変えられていないことも印象的であった。銭湯特有の屋根やファサードがそのまま保存されていることで、地域の風景に自然に溶け込み続けている。日常の中で見慣れた建物が変わらずそこにあり続けることは、地域の人々にとって大きな安心感や誇りとなっているのではないだろうか。

レクチャーの際、高谷時彦さんがおっしゃっていたように、かつての銭湯建築や暮らしの習慣が「縦系」として時代を超えて織り続けられてきたとするならば、今回

のリノベーションは、そこに「横系」として現代的な機能や新しい活動を重ねているように感じた。際立って感じられたのは、建築的にもシンプルなフレームを内部に挿入するという構成によって、既存の空間と調和しながら新しい使い方を導いていた点である。これは、形態的にも横系として作用しているように感じた。

カフェやイベントスペースとしての開かれた使われ方が、従来の銭湯の魅力を損なうことなく共存していることに感動した。内部空間も銭湯らしさをしっかりと残しながら、地域の新たな居場所として生まれ変わっている。

今回、TDAセミナーに参加する機会を得て、この建築が紡ぎ出す人のつながりの一員となれたことを、心から嬉しく思う。

【参加者の感想】

地域コミュニティの再生は地道な活動の上にある
城西国際大学観光学部 助教／TDA理事
金子 祐介

今回は、台東区にあるレボン快哉湯で行われた同建築の設計、兼、プログラムの提案者である中村出氏の講演を聞いて、銭湯リノベーションの系譜と、その銭湯を中心とした景観づくりの基点となるコミュニティ再生のプロセスについて考えてみた。

タナカカツキ氏の漫画『マンガサ道』(講談社モーニングKC刊)(2011)を皮切りに、ドラマ化(2019)などによる一般への普及に伴い、近年、若者にサウナブームが起こっている。壇蜜やヒャダインといった人気芸能人が出演している番組『サウナを愛でたい』(2020-)の影響もあって、女性へのサウナブームの浸透も著しい。その動向と相

景観故記

No.11 「建築家・アーバニスト槇文彦氏から学ぶこと」

設計計画高谷時彦事務所／TDA 正会員 高谷 時彦

昨年6月、建築家槇文彦氏が亡くなりました。友人の若い建築家は「偉すぎます。遠い存在でした」といいます。私にとっても雲の上の存在です。ただ本当に幸せなことに、都市工学科の学生時代、槇事務所の13年間、そして独立して自分で建築や公共空間のデザインをはじめた後々も、直接教をいただく機会に恵まれました。そしてまだまだ学ぶことは尽きないと考えています。TDA編集部のお薦めもあり、アーバニストとしての槇文彦氏から、私は何を学んできたのか、拙い一文を記しました。

■都市との向き合い方

槇さんは戦後日本の都市形成については、厳しい評価をお持ちでした。絶え間ないスクラップアンドビルドにより(欧州都市のような)社会資本の形成に失敗したと断言しています。奇しくもMビルのM社長からも同じ言を聞きました。M社長は、自分が正しいと思うイメージでまちを丸ごと作り変えることを使命と考えていました。しかし、槇さんの場合は、庶民が営々と創り上げた一見無秩序で、不確かな都市環境にも優しい目を向けます。むしろ変化の中にも、穏やかさや、きめ細かさという日本の特質が継承されてきたことを評価します。

槇さんが「建築をする」目的は、人々が意識的あるいは無意識的に軟びを感じられる場所をつくり、その集積で都市空間に豊かさを与えることです。そのためには人々が暮らす都市環境の特質を、歴史文化や人々の深層意識をも踏まえたレベルできち

んと知っておく必要があります。『見えがくれする都市』をはじめとする多くの論考も、そうした考えに基づく試みなのです。

例えば、ケヴィン・リンチのランドマーク、ディストリクトなどの概念は、都市を記述し理解するうえでの有効なツールです。しかし、日本の都市空間を文化的、歴史的に理解するうえでは不十分だと槇さんは考えます。『見えがくれする都市』で私は、「道の構図」を担当しました。みちの網目で覆われることで一つの領域がディストリクトとして共通にイメージされることはリンチの指摘通りです。しかし、ディストリクト同士の関係性や、ディストリクト内部の再領域化の作法にこそ、日本人特有の空間意識が投影されている、建築家や都市デザイナーはそこまで考えて日本の都市に向き合うべきだ、というのが槇さんのお考えでした。

■個と全体

モダニズム建築は個々では優れているのに、どうして集合することで望ましい都市環境がつくられないのか、個と全体の関係をどうとらえるべきか・・・というのは槇さんの60年代以来の問題提起です。私たちが考えるうえでの導きとなるのが1964年の*INVESTIGATIONS IN COLLECTIVE FORM*です。今でも世界の多くの大学で読み継がれているそうです。先見性に満ちていたことに驚きます。

少し話が飛びます。1956年のアーバンデザイン会議で、J. ジェイコブスがロバー

ト・モーゼスのモダニズム都市計画を論駁したことはよく知られています。その場にいた槇さんはジェイコブスに共感していますが、その理由はジェイコブスが関係するコミュニティの保全ということだけではありません。モダニズム都市計画がひとまず議論を避けていた、個(建築など)と全体(都市)の関係をどうとらえるかという点での彼女の見解に共感しているのです。彼女は都市を建築や道路など要素の単純な足し算ではなく、個(部分)と全体が相互に影響を及ぼしあう動的平衡状態にある複雑系として捉えています。個(建築など)が集合することで、都市空間は個にはない新しい質を持つことになり、また都市空間を形成することで個も変質、変形してい



写真1 イドラ島
都市工の学生だった時に槇さんの授業で group form の実例として地中海イドラ島のスライドを見せてもらいました(もっと美しい写真でした)。個々の住居が立体的に集合しています。美しい都市、喜ばしい環境とは、形態やシステムによって支配されるのではなく独立した個の集合するところに生まれるのです。

まっか、銭湯がブームとなり、銭湯施設の新築だけでなくリノベーションが日本各地で行われるようになった。

とくに、銭湯のリノベーションの火付け役となった建築は、小杉湯という東京都高円寺にある銭湯。このリノベーションやプログラム作り(2017-)を行った建築家は、馬場正尊氏のR不動産でも活躍する加藤優一氏。どんなことを考え小杉湯を再生させたのかということについては、彼の著書『銭湯から広げるまちづくり 小杉湯に学ぶ場と人のつなぎ方』(学芸出版社)(2023)を読んでもらえばわかるだろうが、昭和8年(1933)創業の木造建築であるこの銭湯をリノベーションし、地域コミュニティを維持するというコンセプトが、多くのまちづくり系コンサルをはじめ、建築家やデザイナーに刺激を与えたことは記しておかなばならない。

今回、お話を拝聴した台東区にあるレボン快哉湯を再生(2020-)させた中村出氏のつとめるまちあかり舎(椎原 晶子 代表)の設計も、意識していたかどうかは別として、時世としてはその流れの一つを汲んでいると言える。だから、そんなに新しいことをやっているとは言い難い。ただ、古い考えだから、ダメだといっているのではなく、こうした貴重な建築を保存しながら使い続けるということは、人口減少社会にあって、新しいものが作りづらい社会においては、重要な営みであり普通のことだと考えなくてはいけない時代になったのだということだろう。

とくに、今回、講演会を聞くにあたり快哉湯を拝見し、それを維持・再生させるためには、保存だけではいけないことがわかった。現代においては、そのビジネスモデルまで考えなくては、保存は継続しない

ということを学ばせてもらった。コミュニティ再生というキーワードも同様に、古いコミュニティを維持することが重要なのではなく、新しいコミュニティを呼び込み、パッチワークしていくことが重要なのだと感じた。景観も同様に、この建築のように古い建築がどのように周辺の開発とパッチワークになるのか、そこが今後の課題かもしれないと改めて感じる事ができた。



今回の連続セミナーには、TDA会員だけでなく実に多くの人が、中村さんの話を聞きに集まった

ます。それが複雑系としての都市空間です。槇さんの都市のとらえ方に通じます。*INVESTIGATIONS IN COLLECTIVE FORM*に掲載されているgroup formの図において、個を表象する図形が不定形であいまいののは、個は集合の中で変質、変形をするということを反映しているように思えます。以上のような文脈の中で、「都市と建築を同じまなざしでみよう」、「家は小さな都市、都市は大きな家なのである」という槇さんの言葉を理解することができます。

■パブリック空間

槇さんは建築の姿かたちは人々に美を、そして建築の空間は歓びを与えるものだと述べられています。空間としては、建築から都市までさまざまなパブリック空間が重層的に表れるとき、都市空間の豊かさが生まれるという認識です。その見事な事例が代官山ヒルサイドテラスです。

パブリック空間については、近年「Another Utopia」などで「施設ではなくオープンスペースにクリティカルな重要性をまず与える」という空間の作り方を提唱されていますが、その考えかたは、何十年も変わっていないと思います。槇事務所時代、あるプロジェクトで槇さんがトレーシングペーパーにまずお書きになったのが細長い広場だったことをよく覚えています。パブリック空間が、その後のスタディの出発点となりました。

先日TDAの皆さんと、大阪駅前のグラングリーンを見学しました。駅前の超一等地

を「(第一に)大きな公園+(残りを)建築敷地」という発想で再構成したことには敬服しました。説明を伺いながら、私は槇さんのスケッチを思い出していました。

■景観

好ましい都市景観として分かり易いのは一定の秩序感を共有する建築群の安定した集合ですが、資本が跋扈し多くのステークホルダーの利権が絡み合う現代の都市空間では、そういった状態の実現は難しいと考えられていたのではないのでしょうか。部分的に「コクのある空間(建築空間と外部空間)」を増やすのが良いと述べられていたと思います。また別のところでは「そろえる」よりも、連歌のように自由にやればよいということもおっしゃっています。ただ連歌の会には優れた建築家が集まっていることが前提です。槇さんの建築を作る際の厳しい一面です。

■「都市という一枚の絵」

私が一番好きなエッセイかもしれません。建築や都市空間がつくられるには「一枚の絵、一本の線は白紙の上にだれかが暴力をもって引かなければ」なりません。「およそこれほどロマンティックな暴力行為はない」と続きます。トレーシングペーパーに引かれた自分の線が、形となっていくのが私たちの職業です。常に造形への欲望と葛藤、責任があります。しかし槇さんのまなざしは、そこにとどまらず、建築家の暴力行為によってつくられた空間に、ひとびとによって「新しい絵」が書き加えられてい

くことにまで及びます。とはいえ、一本の絵を描くことで運命的な力を刻印した建築家・都市デザイナーの責任が終わるわけではありません。

紙幅が尽きてきましたが、書き残してしまったことー建築家・都市デザイナーの持つべき倫理観や自由の問題、また空間と人々の行為が時間とともに創り上げる「場所」のことなどを考えるヒントは、この50年前のエッセイの中にちりばめられています。槇さんの建築作品の表現は実に多彩です。一方でその根底にあるアーバンストとしての槇さんのお考えは、時代を超えて普遍的なものであることを、改めて感じるのです。



写真2 ミロ美術館(パルセロナ)設計:ホセ・ルイ・セルト

槇さんは師として丹下健三(東大)とホセ・ルイ・セルト(ハーバード大)を挙げています。槇事務所時代、ヨーロッパ旅行のための長期休暇を突然申し出たところ事務方トップにひどく怒られてしまいました(当然です)。直後に、槇さんは「セルトの建築は見たほうがいいですよ」と穏やかに薦めて下さいました。

第13回：日本大通り① パリのシャンゼリゼのように

日本大通りは、神奈川県横浜市の関内地区の中心を貫き、開港の地である「象の鼻（象の鼻パーク）」と横浜公園を結ぶ延長430m、幅36mの銀杏並木が特徴的な街路です。

その歴史は古く、横浜の開港にあわせて形成された外国人居留地が1866年の大火により、その大部分を焼失した後、イギリス人技師ヘンリー・リチャード・ブラントンによって防火帯の機能を備えた広幅員道路として設計され明治初期に整備されました。この整備に伴い、日本大通りは当時の主要な官公庁が並ぶ横浜の中心市街地となりました。設計者ブラントンの胸像は横浜公園に設置され、今でも日本大通りを臨んでいます。

その後、1923年の関東大震災後の震災復興事業にあわせて、銀杏が植えられるとともに、車道が拡幅（歩道7m - 車道22m - 歩道7m）されています。2002年のリニューアルまで、その姿で市民に親しまれてきました。

沿道には「神奈川県庁本庁舎」、「旧英国総領事館（横浜開港資料館旧館）」、

「横浜地方裁判所」、「旧横浜商工奨励館（横浜市情報文化センター）」、「旧三井物産横浜ビル（KN日本大通りビル）」、「旧日本綿花横浜支店事務所棟（THE BAYS）」といった歴史的建造物が建ち並んでおり、落ち着いた雰囲気のエキゾチックな空間が形成されていることも特徴の一つでした。

兼ねてから中心市街地の緑の軸線（都市軸）として再整備の構想はありましたが、日本大通りに地下駐車場と地下鉄駅（みなとみらい線「日本大通り駅」）が整備されることとなり、（どうせ掘り起こしてやり直すのであれば）その復旧工事とあわせて、日本大通りの本来の魅力である景観性や歩行者空間の質を高め、再び「都市の顔」とするための再整備を行うことになりました。



当初は、日本大通りの中央に地下駐車場の出入り口が設けられる計画でしたが、それでは「日本大通りから海に向かう通景線（ビスタ）」が失われるとして、関係局が協議し、入口と出口をそれぞれ横道に配する計画に変更されました。

また、みなとみらい線駅の開業により増加する歩行者を想定し、震災後拡幅されていた車道を縮小、歩道を拡幅し、ブラントンが設計した当初の構成（歩道12m - 車道12m - 歩道12m）に近い形状にすることを基本的な考え方として、指名プロポーザルを実施、山手総合計画研究所が選定され、FIFAワールドカップ大会に2002年を目標年次として具体的な設計が進められることとなりました。



写真右：現在の日本大通り／左：再整備前の日本大通り（提供：横浜市都市整備局都市デザイン室）

景観サポーター

奥舟なごみ公園
しながわ花海道

屋外空間に彩を。
OUTDOOR + design

SD Lightingは屋外を専門とした照明メーカーです。
屋外で必要とされる照明インフラ、ポールから灯具まで
幅広く製造・販売しています。
私たちは 風景を魅力的にするためのお手伝いが可能です。

SD Lighting株式会社
URL : www.sd-lighting.co.jp
SDLighting
OUTDOOR + design

POLE Luminaire シリーズ

ホワイトボード

梅田駅前やなんば駅前では、多くの人に使われる公園や広場を中心に考えた都市整備が地道に進められてきた。大阪視察では、その地道な取組みについて関係者の方々から直接話を聞くことが

でき刺激を受けるとともに、このような大阪の経験をこれから日本各地の都市整備にも広げていけるかどうかと問われていると感じた。（倉澤）